

中国秋季リーグ戦女子2部最終日結果報告

広島大学体育会バレーボール部同窓生の皆様

(同窓会連絡フォームへ登録いただいた皆様及び同窓会やコートの仲間等でご連絡いただいた皆様へお送りしています。)

いつも大変お世話になっております。

広島大学体育会バレーボール部です。

10/12に岡山大学体育館において、中国秋季リーグ戦男女2部最終日が開催されました。

広島大学女子の結果は、以下のとおりです。

vs 山口大学

●1-2 (18-25、25-23、20-25)

vs 島根大学

○2-0 (25-20、25-18)

- 1位 山口大学 5勝0敗
- 2位 広島大学 4勝1敗
- 3位 島根大学 3勝2敗
- 4位 周南公立大学 2勝3敗
- 5位 山陽学園大学 1勝4敗
- 6位 川崎医療福祉大学 0勝5敗

(中国学連 HP)

<https://chugoku.hiroshima-u.ac.jp/league-aki-2025-2.html>

体感 30℃を超える風通しのない体育館、汗でボールと床が滑り、どのチーム、どの選手も80%程度の力で戦わないといけない状況で、それぞれの基礎的な部分と、真夏の練習でどれだけ追い込むことができたかが、上位3チームの明暗を分けました。山大と広大では、山大側からすると誰一人「広大に負ける気がしなかった」と思うほどの決定的な差があり、島大と広大では、五大学のような空調の利いた体育館であれば逆の結果になっていたはず。8月から北体育館のエアコン設置工事の関係で空調付きの西体育館に練習場所が変わり、他団体との兼ね合いで3時間以内で準備から片付けまでを終えなければならず、この2か月間はほぼ無制限に練習できていた環境から一変することとなりました。五大学でも、秋リーグ一週間前の尾道高校、山陽学園高校との練習試合でも、夏に楽をしてきた部分しか見えず、

与えられた環境下でぬくぬくすることしかできないチームには、はっきり言って落胆しました。練習時間が短くなるのであれば、全体練習以外の部分でそれを補う必要があるし、空調が付いて負荷が下がるのであれば、それもどこかで補おうとしてくれると信じていました。空調の整備が進み、これからはその環境でも追い込めるチームと甘えてしまうチームの二極化傾向が必至となる中、広大が少なくとも今夏は後者であったことは重く受け止めないといけません。スマートフォンやAIの普及で様々なことが便利になる時代、そのツールの中だけで生活しているようでは、見える景色、感じる想いも、誰かと同じで与えられたものに過ぎません。環境は今後も様変わりしていきますが、流されることのない視点で常に課題を見つけ、環境を自ら再構築できるようなチームに、そして人に育って欲しいと願っています。今大会は、8月まで北体育館で汗を流してきた貯金と、あとは2位日程に恵まれました。最終日のような環境は、一日2試合あるチームの方が体力的にしんどくても力を発揮できるものです。

島大戦は山大戦より特別良かったわけではなく、広大の中の攻撃に相手が最後まで対応しなかったことで、両サイドが楽になり、レシーブの一本目から自信を持てたことが大きく、勝因は自分たちと言うより相手にあった試合でした。これまでも何度も言っていますが、相手からボールが飛んで来て初めて考えることがほとんどで、広大のバレーは待ってましたの場面が全くと言っていいほどありません。今回はリーグ戦初スタメンとなったレフトの平山（1年・広島高校）のポジションがキーポイントでしたが、山大戦では特に、平山に何を求めているのか、どこからどこまでの範囲をお願いしているのか、チームとして不明確で、自分たち自身でバレーボールを難しくしているように見えました。強いチームと言うのは、やっていることは意外とシンプルで、経験が浅いプレーヤーには明確な役割を与えるものです。今大会であれば、決めにいかになくていいから相手のこのプレーヤーにボールを触らせるとか、スパイクはサイドに張って声を出して呼ぶとか、ブロッカー裏の軟打とプッシュだけ拾うことを意識するとか、本来はそうした約束事を全員で共有しておかないといけません。山大戦の最終盤、リベロの光本（2年・岡山城東高校）が入っているのに1本目を平山が取り、割れたところから強引にライトに持っていったのスパイクミスに、致命的な練習量を感じました。ただ、平山自身の動きは決して悪くはなく、手首まで出せるようになったブロックは、スパイカーを追うことなくいつでもネットに対して平行で、チームトップレベルかもしれない形の良さで数多くのワンタッチを取りました。また、ライトレシーブでは前のボールがきちんと意識できており、平山からの切り返しがチームの形になっていたことも印象的でした。山大戦では相手がノーブロックでレシーブにまわり、平山のスパイクにはそこから先の工夫が見えなかったもので、より相手が強くなる次戦に向けては引き出しを増やさないとはいけません。

今大会からライトに回った岩永（3年・長崎西高校）は、ようやく殻を一つ破り、レフトか

ら二段で相手を吹き飛ばす以外の選択肢を獲得してくれました。島大戦では途中から打てば決まる状態でしたが、ライトからあれだけ体重を乗せて打てるプレイヤーは、一部でも上位チームにしかいません。今回はトスを上げるのが難しい環境だったので速い攻撃はありませんでしたが、粘り強くトスを上げ続けてくれた大石（2年・宮崎・延岡高校）とも息が合っていて、練習試合で見たライト平行はどこが相手でも間違いなく決まります。一步助走で打っていることは素晴らしいので、それはそれで伸ばして欲しい一方で、助走の準備が遅いときが多く、また、左手をしっかり引き込めればまだまだ打点も威力も上がります。体育館にいただけで汗が流れてくる暑さの中、涼しい顔でキャッチ、レシーブに走り、それでもワイピング不要のポテンシャルは、2部2位で留まっているようなレベルではありません。山大戦では流れを変える一本になり得る場面で、少なくとも3回はワンタッチを取られて切り返されていましたので、単にもっと力強く打つ、ではなく、トスや助走の長さを変えるなどの時間の使い方や、中から外に入るなど場所の使い方を工夫して、揺るがないライトエースプレイヤーとして一気に飛躍して欲しいと思います。

岩永の活躍が目立った一方で、これまでチームを牽引し、常に求められていることを上回ってきた西岡（2年・兵庫・姫路高校）は、立ち上がりミスが目立ち、トスが割れていたとは言え、バックアタックを含めて中途半端なプレーが多かったと思います。また、光本はリベロポジションでは初めてと言っていいほどの好プレー、島大戦でのディグからのライト攻撃がありましたが、指示の声が弱く、受け身のチームカラーを色濃くしてしまっています。1年生の春、1年生の秋、2年生の春、2年生の秋…と、4年間で8回あるリーグ戦では、それぞれの時期に応じて求められることが変わりますが、2年生の秋にして初めて、二人とも求められていることよりも残念ながら下回ったと感じました。二人はバレーボールに対する理解力、経験力が高く、洞察力も優れているのでチームの和を成す上で欠かせない存在ですが、和を重んじ過ぎていて、それはひとえに人が良いからですが、チームの中心としての自覚、責任、牽引力が足りていません。3、4年生の意見を尊重することはもちろん大切なことですが、発信よりも受信を優先することは、チームのためにも、自分のためにも、誰のためにもなりません。4年生の東（愛媛・宇和島東高校）がコート内外を問わず、ずっと声を出してくれていますが、東が作りたいのは決してワンマンなチームではなく、みんなが伸び伸びと、生き生きと楽しんでバレーボールをするチームのはずです。センタープレイヤーと言うのは、半分の確率で、最後の1点をコートの外で過ごさなければいけません。東はそのときも全力で声をかけてくれると思いますが、その声に応えられるだけの努力が、本当に今出来ているのでしょうか。島大戦のように、負けてから、追い込まれてからでない力を出せない自分たちに、果たして納得してもらえるのでしょうか。西岡と光本が、このチームをどうしたいのかが外から見て分かるようになったとき、このチームは次のステージに上がるのだと思います。入替戦まで3週間、この夏を取り返すだけの時間はあります。今年のチームは、まだまだ始まったばかりです。

今週末は、東亜大学体育館で男子 1 部 Second stage が、環太平洋大学体育館で女子 1 部 Second stage が行われます。

ホームアドバンテージと言うのは、誰もがそうなると思っているときほど、ホームチームのプレッシャーとなるものです。

男子は勝つまでではなく、勝った後までを意識できるチームレベルにあると思いますので、最終週で平成にもう一度チャレンジできるように高みを目指して頑張りましょう。

引き続きよろしくお願いいたします。